

汪士慎と馬氏サークル

—汪士慎「墨梅図冊」からみる18世紀揚州の書画鑑賞—

12枚の絵からなる冊子それぞれに描かれているのは梅です。モチーフは極端に限られています。ここではそれぞれの梅が違った個性を持ち、自己主張しているようです。

「墨梅図冊」(大和文華館蔵)の作者、汪士慎(1686-1759)は安徽省休寧の出身、30を過ぎた頃、江南の経済都市として未曾有の繁栄を誇っていた揚州にやって来、売画活動を始めます。画家は筆を工夫して使っています。生紙の上に筆を進めると、その吸収率のちがいに、墨の溜まりに微妙な階調の差ができます。画家はその運筆の速度差を利用し、ゴツゴツとした幹の質感を表しています。またすこし寝かせた向き(側筆)で幹を、立てた向き(筆先)で枝を描き、柔らかさの違いを表現しています。なるほど梅は老獪な幹にも可憐な花を咲かせますから、その対比を表現することは墨梅の一つの見せ所でしょう。このような表現は金農や、さかのぼると元の王冕などに見られるものです。また輪郭によるものと、墨面からなるもので、紅白の梅花を表しています。

これを例えば南宋揚補之「四梅図巻」と比較してみましょう。この作品では蕾から少し開いた梅、そして満開から散りゆくまでが描かれます。梅の幹や蕾は、その克明な描写力によって時間の差異が表現されています(図4)。しかし汪士慎の作品では梅花の描写に大きな違いは

みられません。作者はむしろ梅枝が広がる画面の構図や筆の動きに興味があるようです。

しかしここで連続する画面に変化をつけるために、重要な働きをなしているものがあります。画面に添えられた詩です。例えば第八開(図2)では次のような詩が添えられます。「馬がゆっくり歩む橋のたもと。ふと見ると満面の梅の花、馬の一步ごとに梅花が舞っていく、ああ、なんといい香りだろう。」ここではただ垂れ下がる梅枝を描いただけですがこの詩があることによって、梅枝の下に作者が思いつく花びら舞い散る空間があることが想像できます。また第十一開(図3)では「私の心を誰が分かってくれよう、ああ、梅の花がなければ詩なんて作れない。もう温かい春の風が、梅の梢へ向かって吹いているよ」という詩が添えられます。この場面では梅枝がわずかに上をむいて描かれますが、何気ないこの動きに観賞者は春の光と風を感じることが出来ます。それはこの詩の表現が梅花の描写を説明し、観者の想像力を満たしているからなのです。

中国において絵画に詩を添えることは古くから行われてきたことですが、特に注意すべきは本図が制作された揚州におけるその変化です。揚州八怪と呼ばれる揚州で活躍した八人の画家たちは自分の個性ある画風を作り出し、またそれが一旦

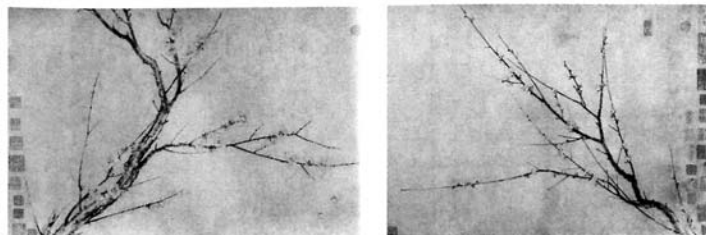


図4 揚補之 四梅図巻(北京・故宫博物院、全四図のうち、蕾(右)と散る梅(左))



図5 九日行庵文譚図巻(クリーブランド美術館)

確立すると、自己模倣を繰り返しながら、大量の絵画を生産していきました。それは彼らが日々の生活を売画で暮らしていたからです。描写だけで梅花固有の表情を感じさせるような精緻な表現は汪士慎にはなされていません。汪士慎は、同じ筆法を繰り返しながらも、それを詩によって説明することで固有の表情を絵に与えました。同じモチーフの繰り返しと固有の詩による説明は、同時代のほかの揚州の画家たちにも見られる顕著な特徴です。

揚州では塩の取引で成功した塩商を中心に、文化的生活を求める商人たちが、広大な自宅に芸術家たちを住まわせ、種々の芸術活動を行っていました。その代表格が馬曰琯、馬曰璐の兄弟です。その邸宅には多くの文化人が寄寓し、若き日の汪士慎や方士庶もその一人でした。馬氏兄弟が主催した雅集を描

いた作品では、園林のなかで書画を楽しむ馬氏兄弟とそのパトロネージを受けた文化人たちの肖像が描かれています(図5)。この日の雅集に汪士慎は参加できなかったのですが、汪士慎の絵画制作は、いずれも彼らのために描かれました。揚州の画家は多くが個人の詩集を出版しています。彼らの活動は絵画の他にも文学が重要であり、馬氏兄弟もまた詩文の才能をもって養うべき文化人を評価していました。汪士慎「墨梅図冊」に添えられた詩は元・貢性之によるものです。この画の鑑賞者もまた文学修養のあるパトロンであり、そのような人物に鑑賞されることを前提としたものであればこそ、梅花の繰り返しともみえる単調な描写が、文字による説明を伴うことによって豊かな表現となりえることに汪士慎は気づいたのでしょう。

本作には題詩、構図を同じくする作品が知られ、その関係は今後の課題です。ただ汪士慎の他の作品にも見られるこのような表現傾向こそは、18世紀揚州の、より多くの大衆の書画鑑賞体験の需要に答えた、その産物だったとは言えるでしょう。

(塚本鷹充)

(図4は『中国美術全集』絵画編4 文物出版社、1988年、図5はEight dynasties of Chinese Paintings, Cleveland Museum of Arts, 1980より複写させていただきました。)

図1 汪士慎 墨梅図冊
(全十二開のうち第七開)

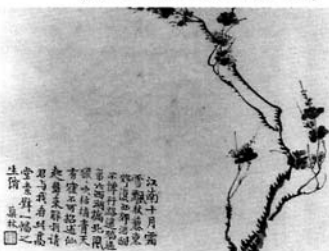


図2 第八開



図3 第十一開

